



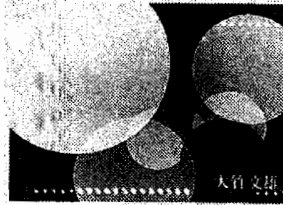
日本の不平等

大竹 文雄著

この一冊

日本の不平等

格差社会の幻想と未来



(日本経済新聞社・三、二〇〇円)
▼おたけ・ふみお 61年生まれ。大阪大学教授。経済学博士。専門は労働経済。主な著書に「雇用問題を考える」「労働経済学入門」など。

所得格差の実態を周到に分析

日本の所得格差は本当に広がっているのか。答えはそう簡単ではない。所得の定義や観察期間、対象範囲により得られる結論が異なるからである。本書の第1の特徴は、徹底した実証主義に則り、先入観にとらわれることなく、事実全てをデータから解き明かそうとしている点にある。

著者は国内外の先行研究を参照しながら、政府統計のミクロデータを最大限駆使し、それでも不十分な情報は自ら設計した調査で補う。

その結果、八〇年代半ば以降の所得格差拡大は、年齢内で格差の大きい高齢者比率の上昇と単身・二人世帯の増加を反映したものであり、決して「日本の格差社会への移行を示唆」しているわけではない」との結論を導き出す。その主張は最近目立つ「社会不平等化論」とは相容れないが、地道な研究の蓄積に基づく論だけに強い説得力を持つ。

それでは、なぜ人々は格差の拡大を実感しているのか。その原因をゼロ・インフレ下の人々の心理に求め、たどるところに第2の特徴がある。従来の経済学では人々の意識や効用は与件とされ、経済事象によってどのような影響を受けるか、十分検証されてこなかった。それに対し、著者は最近の行動経済学の考え方や手法を援用。平均賃上げ率ゼロの経済では、賃上げ経験者と同数の賃下げ経験者がいて、その分、より多くの人に格差の拡がりを実感させる仕組みになっていることを示した。さらに、別の要因として、九〇年代後半以降、消費格差の拡大が五十歳未満の層で観察されるようになった事実を指摘している。

では、具体的に誰が格差を感じ、再分配政策やワークシェアリング、成果主義の導入などを求めているのか。その背景にはどういふ事情があるのか。次々連鎖して浮かび上がってくる疑問に対し丁寧な分析が加えられており、そこからは問題の核心に迫りたいという著者の強い意気込みが感じられる。

記述面でも難しい数式を補論に回すなど、初学者にも理解できるように細かい工夫が凝らされている。類書が多いなか、本書はこの分野の決定版ともいふべき内容の書籍であり、日本が抱える所得格差問題を沈着冷静に考えてみたいと思う一般読者にも是非熟読していただきたい。

《評》慶応義塾大学教授 樋口 美雄